

徳島県立博物館友の会会報

アワーミュージアム

第53号 2013年12月25日発行

阿波の俳人会図 ^えず ^{そら} ~ある日の句会風景~たき ^こ 滝 よし子 (友の会会員)

俳句といえば芭蕉や一茶・正岡子規などそれぞれ自分の好きな句を一つや二つ ^{そら} 誦んじています。俳句は年齢を問わず身近に愛され、親しまれている日本の誇る世界最短の文学といえます。

江戸時代は庶民の文芸として各地で流行しました。相撲番付に見立てた「風流好士相撲合」といったものまで作られました。ちなみに俳聖といえば松尾芭蕉のこと。全国的に弟子も多く、武士を初め豪商、医者といった富裕層から庶民に至るまで身分もまちまち。阿波の俳諧史上でも芭蕉に傾倒した俳人

がたくさん活躍し、県内各地に芭蕉の句碑が建立されています。板野町にも江戸後期から明治時代の俳句関係資料はいろいろあります。

さて今回紹介する「阿波の俳人会図」(写真1)は、紙本淡彩、句会の様子を描いた一幅の掛軸です。簡略な作風ながら穏和で何とも楽しそうです。六人の俳人は当時名の知れた人達で、武士・僧侶・組頭庄屋・寺子師匠など身分を超えた句会仲間です。

この掛軸は板野町高樹の宝厳寺所蔵、地元の文化を伝える貴重な作品です。軸の左下に「己亥秋九月 応需写 月江老人 画」(写真2)とあって、天保10年(1839)、絵師犬伏月江の筆によるものです。

犬伏月江(1781~1863)は、いまの板野郡藍住町東中富の人。諱は泰存、のち泰忠。通称は武左衛門。



写真1：阿波の俳人会図（宝厳寺蔵）

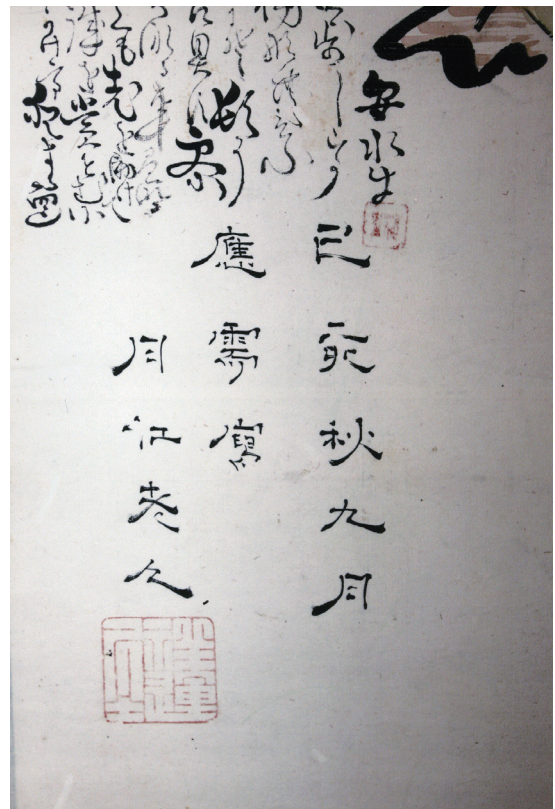


写真2：絵師犬伏月江の筆（阿波の俳人会図の一部）

号は梅溪・一白齋・月江と称し、書画・俳諧ひいに秀でた人（福田憲熙著『阿波画人志』）でした。

月江の作品はこの掛軸の他にもあります。月江は文政5年（1822）、宝厳寺本堂の天井絵に、文政9年、十五番札所国分寺にいずれも大作を奉納しております。俳諧では「細香」の号と思われませんが未確認のため、どなたかご存じの方はご教授ください。

絵図の右上に掛軸の作られた趣旨が書かれています。

ある日恭礼舎に風話の折々梅子と発起して、眉の霜かしらの雪にめでたき自門の人々を撰えらび、細香主人の筆に倂おもかげを写し、おのおの一筆自筆の乞むとなり、されど既すでにひと一とせちかく此事等閑なおりなりしに、いまや画像調ひけるにぞ、爰ここに字かゝれ、そこに至り頓とみに一軸にものせんとて、其旨趣もしるせよとなる、求に随ふは天保十己亥松菊のさかづきをめぐらすいとまふく笛を ㊦（兎道）述了

今世の風交あさからざれば来世の復遇またも亦たのしかるべし、況いわんや六道に向て游戲せんとは大権聖衆の道楽なるをや
生なりかはり交む露ひざの膝がしら 野馬道人六十九歳 ㊦

ことの葉のはなさく菊の林かな 小春老人 ㊦
はつ雁や骨のおれたる并ならびぶり 兎道 ㊦
水上に月ふりすてゝ行しぐれ 梅こ ㊦
山水は茶によし花にほとゝぎす 蟻山 ㊦
我杖讚（本文省略）安水牛 ㊦
年忘にもわすれずよ古雅之助

俳人の略歴

野馬道人＝一番札所靈山寺第18世住職。俳諧の宗匠、美濃の森々庵松後の門人、文政2年多宝塔建設の発願者。

小春老人＝藩士、武市左兵衛 高二百石 藩主齊昌公の命で桜間の池の碑石を建立。小春園蓼花と号す。森々庵の門人。

安水牛＝安藝嘉兵衛、板野町川端の人。組頭庄屋、

水牛子荷青と号す。森々庵の門人。

蟻山＝長野県の人。姓は依田、四国遍路に来て松村の成光寺（現在は廃寺）で出家。

兎道＝岡本友五郎、板野町西中富の人、寺子師匠で、野馬道人高弟。

梅子＝撫養の人。その他は不詳。 以上

この掛軸の人物像は絵師犬伏月江が描き、俳句と文章はそれぞれ6人の俳人の自筆、いわば7人の合作です。

また宝厳寺には歴代の御住職が収集された日本美術史上著名な絵師、たとえば雪舟を初め、狩野探幽・池大雅・円山応挙・徳島藩御用絵師等の名品が展示されています。

ペリー来航と遣米使節

鳥居 喬（友の会会員）

徳川幕府崩壊の約15年前1853（嘉永6）年、ペリー提督率いる東インド艦隊の軍艦4隻（蒸気船2、3本マストのスクナー2）が浦賀沖へ来航し、砲艦外交により開国を強要しました。

アメリカ艦隊来航はオランダ情報（当子年阿蘭陀別段風説書）により1852年7月頃事前に知り得ていました。老中首座阿部正弘は溜間の諸侯（譜代大名）御三家、一部の奉行、外様では薩摩藩にも知らせていました。当時は強硬な「打ち払い令」から「天保新水令」即ち「発砲せず必要な物資を与え帰帆させる」に転換していました。ペリーは1853年7月8日来航し、7月19日には帰帆しました。大統領フィルモアの親書を渡し、返事は明春にと云って返書も貰わずに早々に帰帆しました。何故、早く引き揚げたのでしょうか。

艦隊はアメリカ東海岸ノーフォークを出港し、

喜望峰きぼうほうを回り、モーリシャス、セイロン（現スリランカ）、シンガポール、香港、上海、那覇、小笠原を經由して、約8ヶ月を掛け江戸湾えどわんにたどり着きました。当時のアメリカは海外基地を持たず補給が困難でした。石炭補給船を随伴していましたが、それだけでは不足外洋では帆走も止む得なかったようです。幕府との交渉が長引けば食料、石炭の不足等で弱みをさらすことにもなり4隻では威圧不足とも考えたのでしょうか。幕府に下駄を預けた格好で早々に引き揚げました。

明けて1月16日、ペリーは軍艦10隻（蒸気軍艦3、帆走軍艦7）運送船3隻の艦隊で浦賀沖へ来航し、3月3日、漂流民保護、薪水食料給与の日米和親条約と6月18日に下田追加条約を結びます。幕府は避難港として、箱館は18ヶ月以後、下田は即刻開港し、領事又は代理人の駐在許可を与えることを約束し、ペリー艦隊は帰帆しました。1858年には日米通商条約を結び、批准書は日本からワシントンへ、アメリカ船が迎えに来て届けることに決まりました。

こうして遣米使節は1860年1月蒸気軍艦ポーハタン号に正使新見豊前守正興、副使村垣淡路守範正、監察小栗豊後守忠順外74名と生活用品、食料、土産などを積み込みます。軍艦なのでスペースが無く、大砲を取り外し甲板に特別建物を造り、随行者や荷物を収容しました。品川を1月18日に出港し、中部太平洋航路を取りサンフランシスコを目指しますが、暴風雨に遭い船体を損傷し、ハワイに寄港修理してサンフランシスコに3月9日到着、18日出港パナマまでは船で、後は汽車や船を乗り継ぎ、3月24日ワシントンに到着しました。一行は各地で大歓迎を受けました。批准書を交換し、やはり帰りもアメリカ軍艦でニューヨークから大西洋、喜望峰、インド洋を廻り世界一周航海となりました。幕府はこれとは別に日本人が日本の船でアメリカへと決めていました。船は二転三転し最終的にオランダ建造の咸臨丸と決まりました。一行は軍艦奉行木村稔津守（司令官）、船将（艦長）勝麟太郎、医師、水主、火焚きを含め総勢91名、外に日本近海で座礁し、帰国待ちアメリカ測量船の船長と船員10名

が乗り込みました。

1月13日に品川を出港し、夕方浦賀で生鮮食料、飲料水を積み込みサンフランシスコを目指して北上し（北太平洋航路）、間もなく低気圧に遭遇（いわゆる爆弾低気圧と呼ばれているもの）海は大荒れで航海は難航します。日本の船員はほとんど役に立たず、2月26日サンフランシスコ入港直前まではアメリカ船員が操船しました。勝艦長は船酔いが激しく、船室から出られず寝ていました。中浜万次郎、小野友五郎外数名が活躍したに過ぎませんでした。日本の水主やその他の乗組員は、長崎から江戸までを始め、陸沿いの沿岸航海の経験しか無く、外洋航海の経験はありませんでした。

サンフランシスコへは正使一行より十数日早く到着し大歓迎を受け、船の修理も合衆国の好意で無償でしてくれました。咸臨丸は正使一行が無事パナマに到着したのを確認し、3月19日帰国の途に就きました。帰りは日本人のみで操船し4月4日ハワイに寄港、7日ホノルルを発ち5月5日浦賀に帰港しました。ちなみに咸臨丸に積み込んだ品々を列挙すると下記の通りです。

米75石、麦4石、挽き割り麦2石、醤油7斗5升、味噌6樽、砂糖7樽、小豆2石、大豆2石、胡麻2斗、唐辛子5升、そば粉6斗、葛粉2斗、鰹節1,500本、梅干し4壺、酢6斗、塩3俵、塩引鮭、灯油7斗5升、ろうそく7,500挺、半紙7束、美濃紙3束、炭150俵、薪1,350把

幕府は最後にやって来たアメリカと最初に条約を結びました。イギリス、ロシアなどの列強を排し、建国77年の若いアメリカと条約を結んだ事は、幕府の英断と云う人もいます。この条約はアメリカに最恵国待遇を与え、期限の無い片務契約（日本の義務のみを記した12箇条）でした。砲艦外交に屈した不平等条約と云われています。

しかしながら、19世紀は拡張主義、植民地主義の時代でこの条約は平和的に結ばれました。江戸湾の大砲装備はペリー艦隊規模のものは20門程しか無く、命中率、破壊力、機動力からすれば10分の

1にも満たないと推定されています。イギリスによるアヘン戦争、オランダやフランスによるジャワ（現インドネシア）やインドシナ（現ベトナム）などは領土割譲、賠償金支払いなどが伴い交渉による条約は希有と言えました。

^{どうかつ} 恫喝による不平等条約と云われますが、当時の実力ではやむを得ないことであつたと思います。幕府首脳と応接係筆頭林大学頭以下奉行達は健闘したと考えられます。

参考文献

- 尾佐竹 猛 『幕末遣外使節物語』1989年
 加藤 祐三 『幕末外交と開国』2012年
 土居 良三 『軍艦奉行木村摂津守』1994年
 マシュー・C. ペリー 木原悦子訳 『ペリー提督日本遠征日記』1996年

友の会行事報告

みぶち 深淵の自然体験

- 日時 6月9日（日）9:00～17:00
 ○場所 三好市東祖谷深淵
 ○担当 ^{やまだかずたか} 山田量崇（博物館学芸員）
^{みよしやすひこ} 三好康彦（博物館課長補佐）
^{まつおか いさお} 松岡 功（博物館主任）
 ○参加者 18名

前々日まで9日の天気予報は晴れ。しかし、前日からあやしい雲行きになり、不安が増していきました。というのは、今回の行事の目玉「ウスバシロチョウの大乱舞」は晴れているというのが第一条件だからです。

当日出発前の文化の森はくもり。なんとか半日ももってくれたらという淡い期待を胸に出発しましたが、現地到着後すぐにあいにくの雨模様となりました。ただ、小雨がぱらつく程度で、お昼過ぎまでチョウをとったり山野草をとったり、有意義なひとときを過ごしました。ウスバシロチョウの乱舞は見られませんでした。2頭採集することができまし

た。昼食後とったチョウについて解説した後、予定を少し早めて博物館に戻り、部門展示「カブト・クワガタ展」の展示解説を行いました。

（松岡功：博物館主任）

Voic^e 参加者の声

●^{おがたここね}小方心優さん

ウスバシロチョウはとれませんでした。でも、モンシロチョウやモンキチョウ、スジグロシロチョウや貴重なキチョウなど、たくさんのチョウがとれて、近くで見えました。楽しかったです。今度はウスバシロチョウがフワッとわくようにとぶところが見たいです。

●^{まつかきようこ}松家京子さん

数年前に来たときにはダム湖の水が満々とあったのに今回はすっかり干上がっていました。

参加者のほとんどの方は神社前の草原で昆虫採集に夢中でしたが、私達は橋のある所まで散策しました。橋の辺りは水量も多く深緑色の清流でした。私が捕らえたのはリングコフキゾウムシとハチモドキの^{はえ}の蠅だけですが、会員の捕らえたウスバシロチョウを見ることができました。透ける翅（羽根のこと）はまさに天女の羽衣だと思いました。蝶の透ける翅なんて初めてです。天候の関係でウスバシロチョウの飛ぶ様子が見られなかったのがとても残念です。

でも、爽やかな風に吹かれながらコガクウツギ、アサガラ、ヤマアジサイなどの観察や野鳥の声を楽しむことができました。「これは？」と尋ねると、和田先生が即座に植物や虫の名前を教えてくださいました。ありがとうございました。有意義な1日でした。

●^{しのほらみずき}篠原瑞稀さん

めずらしいウスバシロチョウのメスをつかまえることができたので、うれしかったです。またこんな行事に参加してみたいと思いました。めずらしい虫をつかまえたら標本にしてみたいです。



オリエンテーション



チョウの採集



ウスバシロチョウを捕まえたよ！



植物観察

友の会行事報告

自然体験合宿 in 室戸

- 日 時 8月17日(土)～18日(日)
- 場 所 高知県室戸市
国立室戸青少年自然の家
- 担 当 徳野壽治・伊勢ひとみ
南部洋子(友の会役員)
中尾賢一・茨木 靖
辻野泰之・山田量崇(博物館学芸員)
松岡 功(博物館主任)
- 参加者 19名

今年は「自然体験合宿 in 室戸」と称して、国立室戸青少年自然の家で宿泊し、室戸岬とその周辺の自然を体験しました。

17日の自然体験活動1では、まず津呂山展望台で室戸半島の地形を観察したのち、室戸岬でアコウやサツマゴキブリなど亜熱帯の生きものの観察を行いました。昼食後、遊歩道を歩いて隆起地形やグンバイヒルガオの観察なども行いました。道の駅キラメッセ室戸にあるクジラ館を見学したのち、自然の家へ向かいました。

日没後の自然体験活動2では、アカメガシワやウバメガシなどに囲まれた見晴らしの良い展望台で灯火採集を行いました。月明かりの影響からか、飛来した昆虫類はさほど多くなく、ツヤアオカメムシやオオホシカメムシ、ヨコバイ類などのカメムシの仲間ばかりが目立ちましたが、少数ながらオオトモエやシャクガ類などのガの仲間、ミヤマカミキリやサビカミキリ類などのカミキリムシの仲間などもやってきました。

18日午前中の自然活動体験3では、おもに昆虫の観察と採集を行いました。モンキアゲハ、キチョウ、ツマグロヒョウモン、オニヤンマ、キリギリス、ショウリョウバッタなど、多種多様な昆虫が見られました。また、昆虫と関係した植物もあわせて観察しました。

うだるような暑さの中での自然体験でしたが、室戸の自然を満喫した2日間となりました。

(中尾賢一・山田量崇：博物館学芸員)

Voic^e 参加者の声

しのはらみずき
●篠原瑞稀さん

昆虫や植物、地そうのことがよく分かりました。この行事に参加してすごく楽しかったです。また参加したいです。楽しみにしています。次回は昔の人のくらしにふれるような体験を入れてもらえたらうれしいです。(とくに古墳)

あしだゆうひ
●蘆田悠日さん

オニヤンマをつかまえました。カメムシをつかまえました。ゴキブリをつかまえました。見たことのない花がありました。見たことのない木がありました。おとまりが楽しかったです。

みきことこ
●三木琴子さん

虫をつかまえるのが楽しかったです。またこんな会があったら行きたいです。

やの たかし
●矢野 隆さん

室戸合宿では、学芸員の先生方が、こちらがあれこれちょっと疑問に思うことについて、すかさず詳しい説明をしてくださり、とても楽しかったです。自然の少ない地域から越してきたばかりなので、虫も石もさまざまな植物もとても新鮮で、2日間図鑑の中で過ごしたようでした。八万町に帰ってきてもまだ初めて見る生きものにたびたび出くわします。

合宿後数日間、息子は室戸で見た昆虫の話ばかり、娘は夏休みの宿題の作文のテーマに室戸合宿を選びました。次回のイベントを楽しみにしています。



参加者のみなさん



アコウの木の下で



ジオパークの見学



植物の解説



昆虫の観察

友の会行事報告

平家の落人伝説

- 日時 10月12日(土) 8:00～17:50
- 場所 三好市(祖谷地域)
- 担当 鳥居 喬(友の会役員)
長谷川賢二・庄武恵子(博物館学芸員)
松岡 功(博物館主任)
- 参加者 22名

3年続いた「義経伝説の道ウォーク」シリーズも、昨年秋の屋島をもって終了し、今年は源氏から平氏へ。

今回の訪問地である三好市祖谷地域には、幼い安徳天皇あんとくと平教経たいらののりつね(国盛)一行がこの地に逃れ、平家再興の望みをつないだという「もうひとつの平家物語」が語り伝えられています。

行事当日は爽やかな秋晴れ。まず最初に訪れたのはかずら橋。スリル満点の揺れる橋を楽しんだ後、祖谷そばやでこまわしでおなかを満たしました。次に平家屋敷・阿佐家へ。計画では外観だけを見学する予定にしていたのですが、ご当主のご好意で家の内部も見学させていただくことができました。続いて東祖谷歴史民俗資料館で、秘境祖谷に残る「平家伝説」と「祖谷の暮らし」に関する展示を見学。最後に、展望台から重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けている落合集落おちあいを見学してきました。

(松岡 功：友の会事務局)

Voic^e 参加者の声

●^{まつお ゆりこ}松尾百合子さん

2度目のツアー参加、楽しい1日を過ごすことができ、ありがとうございました。資料をいただきましたが、バスの中では車酔いのため目を通すことができず、先生方の説明を聞くだけでした。家に帰宅してからゆっくりと思い出しながら目を通しましたが、詳しい資料でたくさんのことを学ぶことができ感謝！！感謝！！

●^{なんぶ ようこ}南部洋子さん

天候にも恵まれ、またベテランの運転手さんの巧みなハンドルさばきで、快適な祖谷への旅程を楽しむことができ、大変お世話になりました。久しぶり(2回目)のかずら橋では観光気分で橋を渡り、祖谷そばに舌鼓をうちました。平家の落人伝説がある阿佐家では、当主の直々のご案内をいただき、正月飾りの話など伝統を引き継ぐ誇りを感じました。地域に生き続ける豊かな文化が、後世に引き継がれていくことを願わずにはいられませんでした。

●^{とりい たかし}鳥居 喬さん

初秋の爽やかな天候に恵まれ楽しく有意義な一日になりました。先生方、参加者の皆様、ありがとうございました。思いもかけなかった阿佐家当主の説明や屋内の見学は、庄武学芸員に感謝です。祖谷川の流れ、琵琶の滝も前日の大雨で水量もあり、見事な景観でした。山地に住む人たちの生活は大変だなと、改めて思いましたが、片方ではこれ以上開発が進まないようにと、矛盾したことも思います。

●^{しのはら みずき}篠原瑞稀さん

ぼくは、最近じょう文時代から江戸時代に興味があって、この行事に参加しました。かずら橋を何年かぶりにわたってとてもこわかったことや、阿佐家の中に入れたこと、歴史民俗資料館で火なわじゅうを見たことが心に残りました。今度は11月にある旅行で彦根城に行きたいです。城の本にあるスタンプを集めたいです。とても楽しみです。

●^{すみとも}住友セツ子さん

「秋深む 落合集落 目のあたり」
「かずら橋 渡り立ち寄る 走りそば」

天気に恵まれて楽しい1日を過ごせましたこと大変嬉しく存じます。皆様とご一緒に落人伝説を堪能しました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。



祖谷のかずら橋



平家屋敷 阿佐家

アワーミュージアム 第53号

2013年12月25日発行：徳島県立博物館友の会
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197
E-mail: mus-fukyu@mt.tokushima-ec.ed.jp